

付けられた概念を担う術語は、その意味を理解する専門家同士のコミュニケーションには不可欠だし極めて有効なはずだ。

問題の「分からなさ」が生じるのは、本来そうした制約の下に用いるべき専門用語や仲間内の言い回しが、専門家から非専門家に向けて、なにげなく、あるいは無反省・無遠慮に使われるときである。この「分からなさ」は、避けたいし、世の中から消えてほしい。

* * *

筆者は、ここ7～8年の間、このような「分からなさ」というコミュニケーション上の問題に向き合う仕事に続けて参加した。勤務先の国立国語研究所が所外からの参加も得て進めた「分かりにくい外来語を分かりやすくする工夫の提案」や「病院の言葉を分かりやすくする工夫の提案」のプロジェクト、裁判員制度発足を見据えて日本弁護士連合会の主宰した「法廷用語の日常語化プロジェクト」、弘前大学佐藤和之氏の主導する「<やさしい日本語>で災害時の緊急情報伝達を」のプロジェクトなどである。それぞれの具体的な内容は、各機関のホームページで御覧いただける。

これらの仕事には、専門的な内容を表現し伝達する際の、専門家の側の工夫や努力を考えるとという共通点があった。筆者なりのまとめかたをすれば、くだんの「分からなさ」を避けるために専門家に求められる工夫や努力には二つの側面がある。

一つは、すでに述べたとおり、専門的な術語、専門用語、仲間内の言葉を、非専門家に向かって無反省に使わないという自制的な努力である。もう一つは、自らの専門にかかわることがらを、術語や専門用語以外の別の用語で、できればごく普通の日常用語で説明できる能力をみがくという積極的な工夫と努力である。

現代社会では、さまざまな専門領域がますます細分化されて活動し、そしてその専門性が、非専門家の眼前に無遠慮に姿を見せていると筆者は思う。そうした暮らしの中には、ここで想起した「分からなさ」の生じる危険性が満ちている。それを回避する最初の鍵は、専門家の側の工夫と努力にまずは握られている。

* * *

ところで、あえて数行を追加するが、われわれの社会言語科学会、その研究大会での発表や議論あるいは機関誌所載の論文は、このような「避けたい分からなさ」「理不尽な分からなさ」から無縁でいると言えるかどうか？ トランス・ディシプリンを旨として多くの専門分野の専門家が集う広場であるからには、この学会には、この種の「分からなさ」の生じる危険性がつきまとっているはずだ。

自らの研究発表を聞いてくれている目の前の会員が、あるいはすぐ隣の席で研究発表を聞く顔見知りの会員が、さらには当の自分自身が、「避けたい分からなさ」や「理不尽な分からなさ」の中にはいない、そう確かに言える学会を目指したいと願う。

本質的な相違点として、対面コミュニケーション様式がチャットに反映している可能性を挙げることができる。例えば、挨拶場面でドイツ語チャットでは抱き合ったり頬にキスし合ったりする表現が多いためどうしても挨拶のやり取りが長くなるが、その点では日本語チャットはあっさりしている。挨拶の場面でも挨拶を終えたあとの場面でも、ドイツ語では二者間で交わされる傾向が強いのにに対して、日本語ではグループになって多者間で行われる傾向が強い。その際、日本語チャットではあいづち的な表現が頻繁に観察される。

このようにチャットについて日独比較をしてみてつくづく意識させられることは、チャット言語がその機械的装置にもかかわらず（もしくはそれゆえに）いかに「人間っぽい」ということである。このようなコンピューター上での言語の「進化」を見て、ライブニッツはなにを思うであろうか。

■□ [03] 第23回 設立10周年記念大会のお知らせ ■□■□■□■□■□■□■□

社会言語科学会の第23回大会は、以下の予定で行われます。今回は大会設立10周年を記念して1日目に記念シンポジウムを2つ開催します。また、ポスター発表会場で「ポスターでみるJASSの10年」「徳川先生コーナー」を設けます。皆様のご参加をお待ちしています。

【日時】 2009年3月28日(土)/29日(日) 受付開始：9:30

【場所】 東京外国語大学 府中キャンパス

(<http://www.tufs.ac.jp/info/map-and-contact.html>)

〒184-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL：(0532) 47-4111（総務課）

【交通】 西武多摩川線多磨駅から徒歩約5分 京王線飛田給駅から京王バスで東京外国語大学前下車、徒歩0分（バス所要時間 約10分）

●10周年記念シンポジウム1

3月28日(土) 10:00-12:00

題目：配慮言語行動研究の新地平

一歴史的・社会的・コミュニケーション的なアプローチの連携から見えるもの一

司会：野田 尚史（大阪府立大学）

歴史的なアプローチから見た配慮言語行動研究

高山 善行（福井大学）

社会的なアプローチから見た配慮言語行動研究

西尾 純二（大阪府立大学）

談話的なアプローチから見た配慮言語行動研究

日高 水穂（秋田大学）
メディア的なアプローチから見た配慮言語行動研究
三宅 和子（東洋大学）

【ディスカッサント】

井出 祥子（日本女子大学名誉教授）
大坊 郁夫（大阪大学）
ポリリー・ザトラウスキー（ミネソタ大学）

●10周年記念シンポジウム2

3月28日（土） 16:10-18:10

題目：アジア圏の社会言語科学

ーアジア的視座が切り拓く待遇言語行動研究の展望ー

司会：生越 直樹（東京大学）

日本語敬語の変化とアジアの敬語

井上 史雄（明海大学）

中国語敬語表現の歴史と現状

彭 国躍（神奈川大学）

韓国における敬語運用と変化の動向ー 庄尊法と呼称表現を中心にー

姜 錫祐（韓国 Catholic 大学校）

トルコ語と日本語における待遇表現の実態

AyşeNur Tekmen（アンカラ大学・国立国語研究所）

●ポスター発表

3月28日（土） 13:30-16:00

●口頭発表

3月29日（日） 10:00-16:15

●第8回徳川賞授賞式および受賞講演

3月29日（日） 13:30-14:15

※ プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.com/jass/23/>

なお、大会に付随して以下の催しもあります。お誘いあってご参加下さい。

◀ 社会言語科学の未来を作る会 第 14 回集会のお知らせ ▶

日時: 2009 年 3 月 28 日(土) 懇親会終了後

場所: 武蔵境駅付近 (懇親会終了後, 懇親会場受付に集合)

主催: 社会言語科学会企画委員会

■□ [04] 博士号情報 ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

(1) 題目: 現代日本語における外来語増加の S-curve モデル
— 大正から平成までの社説の通時的調査を通して —

氏名: 橋本和佳

連絡先: whashimo(at)mail.doshisha.ac.jp

学位名: 博士(国文学) 同志社大学文学研究科より取得

取得年月: 2008 年 7 月

論文要旨 URL: 同志社大学学術リポジトリ

(<http://elib.doshisha.ac.jp/japanese/dissertations.html>)

<概要>

本論文は、大正以降の新聞社説を用いた通時的調査を行い、「外来語がどのように増加してきたか」という量的推移について考察したものである。Logistic 曲線を用いた計量的分析により、外来語の増加過程が典型的な成長パターンである「S 字カーブ」を描くことを明らかにし、そのモデルを提示した。

* * * * *

博士号を取得された方は、題目、氏名、連絡先、学校名・研究科名、取得した年月、概要(150 字程度；英語の場合は 50 語程度)を事業委員会(jassjig2(at)gmail.com(*))までご連絡ください。ニュースレターにてご紹介させていただきます。

*(at)の部分はアドレスの自動収集を避けるために通常の記号に代えて用いています。

■□ [05] 第8回徳川宗賢賞受賞者決定■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

このたび、第8回(2008年度)徳川宗賢賞受賞論文として、次の1論文が選考されました。

●優秀賞

該当なし

●萌芽賞

「糸口質問連鎖」

『社会言語科学』第10巻第2号135頁－145頁

戸江 哲理（京都大学大学院文学研究科・日本学術振興会）

(*) 徳川宗賢賞は2004年度より「優秀賞」と「萌芽賞」の2賞になっています。

賞の趣旨は、学会ホームページ

http://www.jass.ne.jp/tokugawa/tokugawa_kitei.htm

をご覧ください。

受賞者には賞状と副賞10万円が贈られます。

受賞理由は下記の通りです。

《受賞理由》

●萌芽賞

「糸口質問連鎖」

『社会言語科学』第10巻第2号135頁－145頁

戸江 哲理

本論文が扱う「糸口質問連鎖」とは、会話で参加者Aが質問を発し、これに別の参加者が回答するのを一つの契機として、参加者A自身が当の質問で提出した話題について自ら改めて話し始めたり展開したりする発話の連鎖である。論者が「糸口質問」と呼んで注目した会話上の手続きは、参加者が会話の先行きを意図的に制御する手続きとして注目に値する。これは、先行研究で扱われた質問の発話で導入される他の会話手続きとは異なるものであり、論者は参加者の相互行為としての会話の機構を解明するための一つの観点を新たに提出していると評価できる。

また、本論文は、この新たな観点を、具体的な会話資料の分析を通して複数の角度から吟味しているが、その内容はおおむね着実に今後の展開を期待させるものである。

これらの理由により、本論文は徳川宗賢賞萌芽賞にふさわしい。なお、乳幼児をもつ母親たちの育児にまつわる「悩み」を話題とする会話資料を分析対象とし、「糸口質問」が「悩み語りの前触れ」となる事例に注目して分析を行っていることも、ウエルフェア・リングイスティックスにつながる論の姿勢として評価できる。

《徳川賞を受賞して》

戸江 哲理

今回の受賞は、望外のことでした。査読者のかたがたから頂いた、25,000 字を優に超えるコメントの数々。本稿は、これらのコメントに向き合い、くり返し、くり返し書き改めることでようやく実を結んだものです。辛抱強くお付き合いくださった、査読者のみなさん、とくに主査のかた、そして投稿を蔭で支えてくださった、『社会言語科学』編集委員長の生越直樹先生（東京大学）に、改めて深くお礼を申し上げます。また、平素からお世話になっている、串田秀也先生（大阪教育大学）と、会話分析研究会の諸先輩に、このような形でお礼を申し上げるチャンスを得たことは、まったく幸運でした。

本稿の主題は、乳幼児をもつ母親が、どのように育児の悩みを切り出してゆくののか、という点にあります。この主題を選んだ理由のひとつは、この会話の手続きが、子育て支援の現場にいるスタッフや利用者の方々にとっても、大切な課題だと思われたからです。この意味で、ウェルフェア・リングスティックスを掲げる本賞の受賞に、たいへん勇気づけられました。調査に協力してくださったみなさんにも、改めて厚くお礼申し上げます。

子育て支援の調査を始めて今年で 4 年目ですが、本賞という最高の「糸口」を頂いたことを励みに、鋭意、調査と研究を進めてゆきたいと思えます。ありがとうございました。

《著者紹介》

1980 年大阪府生まれ。現在、京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻社会学専修博士後期課程在学中(2009 年 3 月をもって、研究指導認定退学予定)。2008 年から、日本学術振興会特別研究員(DC2)。主要論文: (2007)「悩みの分かち合いの会話分析——『手抜き』の提案とその受け流し」『ソシオロジ』社会学研究会, 51(3): 39-56.



2009 年 3 月 12 日
社会言語科学会 事業委員会発行